

武州公秘話の構想と浅井三代記

—「天文二十三年」までを辿って—

野 中 雅 行

浅井三代記と武州公秘話（新青年昭和6（7））とは、似ても似つかぬ話である。近江北半で京極氏を制圧した浅井氏が江南六角と並ぶほどの覇を唱えながらも、終に信長の侵略によって滅びるまでの三代（亮政—久政—長政）を描いた合戦記と、戦国武将である「桐生武蔵守輝勝」が己れの抱いた少年時代の願望を満たそうとして人の鼻をつけ狙う半生記とは、やはり形も質も似通う所がない。武州公秘話には個人生活の場面が多すぎる、明らかに作家の実生活素材が覗いている。—それで武州公秘話はこれ迄、一部に三代記などの参考資料は見つかるにせよ大部分は谷崎自身の創作に成るものと見なされ、支柱となる典拠はないとされてきた。しかし、それは何を正しく根拠としていたろうか。

武州公秘話の典拠について夙に検討を進めておられた三瓶達司氏「近代文学の典拠—鏡花と潤一郎—」（笠間書院昭49・12・31）において、三代記については①六角抜閑斎→「筑摩—閑斎」、②箕作山の城→「箕作城」、という二点の類比を指摘されたのみで支柱となる典拠の存在を認めておられず、武州公秘話は「部分的に古書

によるところがあったとしても、実は全く架空のもの」とされていた。しかし武州公秘話はその構想時において三代記記述の約40%も部分から物語骨子に関する暗示（指示）を受けており、三代記からモデルを借りなかった所（残り60%）と云えば次の八箇所だけなのである。(1)高清入道関係の一部〔三代記六九頁—七三頁〕(2)上坂関係全部〔同三三—三七、四〇—六九〕(3)朝倉関係全部〔同八九—九〇、九四—九六、九八—一〇〇、一六二—一六七、二二〇—二二二、二四二〕(4)高峯人質以後の江北処理〔同二二—一四〇〕(5)美濃斎藤関係全部〔同一四〇—一四三、一五七—一六二、一六八、一九三—二〇三〕(6)江南戦敗戦の関係〔同一四三—一五六〕(7)信長関係の一部〔同二〇七—二二二、二二四—二二六、二二二—二五一、二五六—二七五(8)その他〔同一〇四—一〇九、一六七—一六八、一七一—一七四〕頁数は私用テキスト改定史籍集覧六、算用数字表記のものに依る。(表1参照)

誤認の一つの原因となるものに、翻案と依拠との中間領域の問題があるのかも知れない。翻案は粗筋や主題につき、依拠は字面につ

きすぎてその中間の領域が見定めにくい。私の結論を先に述べるならば、いわゆる典拠なるものへの忠実な踏襲性をほんのすこし緩めて三代記の中に複合型のモデルを探ってみたらどうだろうかという事である。資料人物と作中人物の一对一对応とか、事件と事件、時代と時代とのそうした対応とかいう考え方を取りはずし、他の人物へ移動しては戻ってくる人物モデル、他の事件や境遇と二重写しにされた事件や境遇に関するモデル、他の時代の気運と混ぜあわされた時代のモデル等々を、典拠の視点で採集したらどうだろうかという事である。——本稿はそうした腹案を調査の途中から抱き始め、要領に従ってモデルを求めた結果の考察である。構想の作られていく内訳にも探索の眼を注ぎながら、さて、その似ても似つかぬ話を谷崎がどう焼き直したかを作中「天文二十三年」まで辿って検討してみたい。

一、出典書目

- 浅井三代記 (改定史籍集覧六)
 江濃記 群書類従卷三八七(二十一輯)
 おあん物語
 信長記 (改定史籍集覧十九信長公記)
 野史 卷二二〇佐々木高頼
 佐々木系図 続群書類従卷一三二一ほか
 日本結髪史 稲葉城一著大正7・12・23
 日本歌謡史 高野辰之著昭和3・9・15

源氏物語

構想の骨子に関わる史料は初めの五・六書、終りの三書は細部資料である。これらはいずれも、(一)構想形成に不可欠と認められる(二)前の盲目物語(昭和6)資料となる(三)大戦直後谷崎蔵書として谷崎秘書の作成した目録中に見え、作品内に徴証が認められる、のどれかに当たるため依拠のほほ確実又は確実と認められる資料である。このほか典拠の候補として

- 近江国坂田郡志 大正2
 近江人物志 大正6
 大日本名所図会 近江編大正8・12・5
 近江名跡案内記 北川舜治著明治24・3・12
 近江輿地志略 寒川辰清享保15
 近江国愛智郡志 昭和4
 近江国甲賀郡志 大正15
 近江国東浅井郡志
 等が挙げられる。(一)大戦直後の谷崎蔵書、または、(二)昭和4年『谷崎』氏と蒲生氏郷」当時、すでに谷崎が近江国蒲生郡志をみていた事実などが根拠である。

二、取材の概要

浅井三代記から谷崎が、内容を採用した箇所は左表「表1」の通りである。斜線部「I」～「V」は谷崎が取材しなかったところ。

〔表1〕浅井三代記の概要

浅井	戦内容	京極	六角	記	事	頁	
亮政	佐和山城とりかけ	高 清	義 実	永正7・3	上坂指揮下亮政ら佐和山とりかけ	33 29 24 10	
				永正7・6	松山佐和山城落城		
亮政	江北内訌	京極戦	高 峯	定 頼	永正8・1	南北和睦 新庄駿河守朝妻城を築く	71~40
					上坂戦	[I]	
亮政	江北内訌	京極戦	高 峯	定 頼	永正14・2	京極高清病死	71 76 71
					永正14・4	京極高峯小谷攻め(第一回包囲) 浅井夜軍の事	
亮政	江北戦後処理、美濃・朝倉関係、江南攻勢など	京極戦	高 峯	定 頼	永正14・9	京極、江南を率いて小谷へ(第二回包囲)	122 109 91 78 76 71
					永正15・5	京極、江南と合して小谷へ(第三回包囲)	
久政	江南戦前夜	高 峯	定 頼	享祿2	久政(18歳)井口弾正の娘を娶る	168~122	
				天文8・5	京極高峯を許し上平へ		
久政	江南戦	高 峯	義 賢 (坂田斎承禎)	天文15・7	亮政逝去	170 174 170 169 169	
				天文15・20	京極高秀長政を惹きむ		
久政	江南戦	高 峯	義 賢 (坂田斎承禎)	天文21・春	六角定頼病死、義賢の代へ	176 176 174 170 169 169	
				弘治3・冬	長政(13歳)江南加賀守の娘と婚約		
久政	江南戦	高 峯	義 賢 (坂田斎承禎)	永祿2・1	長政(15歳)「備前守長政」と改め加賀守の娘を娶る	175 175 176 176 174 170 169 169	
				永祿2・4	長政、加賀守娘を江南へ送り返す		
久政	江南戦	高 峯	義 賢 (坂田斎承禎)	永祿2・6	六角義賢江北高宮の城を攻める	176 176 176 176	
				永祿2・7	新庄駿河守太尾へ人質を渡し江南に侵襲る		
久政	江南戦	高 峯	義 賢 (坂田斎承禎)	永祿3・3	長政浅妻に纏る新庄駿河守を攻める (六角の本居は筑作)	188 180 176 176	
				永祿3・10	長政(16歳)父久政を退位させ家督を受ける		
長政	信長加勢の江南戦	高 秀	承 禎 義 弼	永祿8・春	信長長政を縁者に望み妹おいちを興入れさせる	203~193	
				永祿9	足利義昭南部落ち京極高秀を通して小谷に御座を移す	206	
長政	信長戦	高 次	—	永祿10・1	江南筑作(承禎義弼)落城 承禎鈴江の城に纏る(後敗走)	207	
				元亀1・4	長政信長に心替り	213 213 213	
長政	信長戦	高 次	—	元亀2・2	信長、佐和山を包囲、浅妻にいる新庄駿河守より救援依頼 長政頭如に一向宗徒の援けを請願	216 213 213	
				姉川合戦	[IV]	250~220	
長政	信長戦	高 次	—	天正1・8	お市の方を信長の許へ送る 久政切腹 長政最期 信長、長政の子方福丸を串刺しにする 京極高次世に立つ	252	
				信長の小谷攻め	[V]	252	
長政	信長戦	高 次	—	天正1・8	お市の方を信長の許へ送る 久政切腹 長政最期 信長、長政の子方福丸を串刺しにする 京極高次世に立つ	275~256	
				信長の小谷攻め	[V]	275~256	
長政	信長戦	高 次	—	天正1・8	お市の方を信長の許へ送る 久政切腹 長政最期 信長、長政の子方福丸を串刺しにする 京極高次世に立つ	276 275 276 277 281 281	

〔表2〕 淺井三代記の粗替

1

2

3

u t s r q p o n m l k j i h g f e d c b a

享祿2	久政(18歳)井口彈正の娘を娶る	169
天文8・5	京極高峯(人質)を許し上平へ戻す	169
天文8	亮政家督を久政に譲る	170
天文15	亮政逝去	170
天文15・20	京極高峯長政を惹しむ	174
天文21・春	六角定頼病死 義賢の代へ	176

江南戦前夜

前夜から江南戦へ

京極戦

永正14・2	京極高峯病死	76
永正14・4	京極高峯小谷攻め(第一回包围)	76
永正14・9	浅井夜軍の事 京極、江南を引率し小谷攻め(第二回包围)	91
永正15・5	京極、江南と小谷表へ(第三回包围)	109
永正15・6	京極高峯を小谷へ人質に取る	122

弘治3・冬	長政(13歳)江南加賀守の娘と婚約、養女の資格で迎える	175
永祿2・1	長政(15歳)「備前守長政」と改め加賀守の娘を娶る	175
永祿2・4	長政、加賀守娘を送り出す	176
永祿2・6	義賢ら怒り、江北高宮の城を攻める	176
永祿2・7	新庄駿河守太尾に人質を渡し江南へ運返る	180
永祿3・3	長政、浅妻に纏る新庄駿河守を攻める(江南の業は筑作城)	188
永祿3・10	長政、久政を退位させ家督を受ける	186

佐和山城
とりかけ

永正7・3	上坂指揮下の亮政ら佐和山とりかけ	10
永正7・6	松山佐和山城落城	24
永正8・1	江南江北和睦 新庄駿河守朝妻城築城	33

信長戦

元龜2・2	信長佐和山を包围、浅妻の新庄駿河守加勢を求め	252
	長政、大坂頭如に一向宗徒の援けを請う	252

信長加勢の江南戦

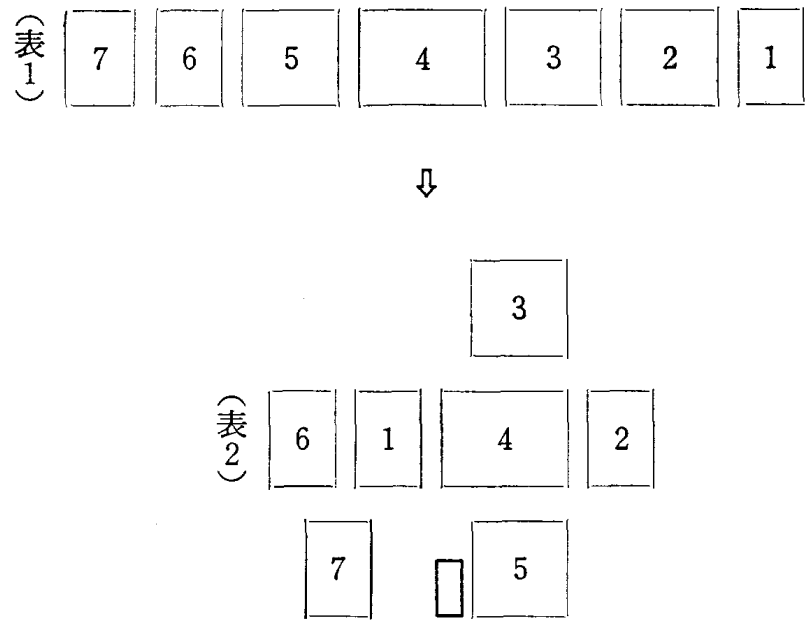
永祿8・春	信長、長政を縁者に望み、妹おいちを娘分として興入れさせる	206
永祿9	足利義昭南郡を落ち京極高秀を通じて小谷に御座を移す	207
永祿10・1	江南筑作城(承禎義朝)落城 承禎鱒江の城に頼る(後敗走)	213
元龜1・4	長政、信長に対し心替り	216
元龜1・5	杉谷善住坊千草越で信長を狙撃未遂 [信長記・野史他]	

信長戦

天正1・8	長政、妻を信長の許へ送る 久政切腹 長政最期 信長、長政の子方福丸を串刺しにしてさらす	275
	京極高次世に立つ	281

三、組替プラン

〔図1〕



谷崎はまず「表1」すべての斜線部（依拠しない部分）「I」を「V」と、「天文二十一年、弘治三年」の間との六箇所に缺を入れ七枚の紙片にした。そして「図1」の上図から下図のように並べ替え

た。「図1」参照

最後に五番目の紙片の左へ信長記や野史から採ってきた「杉谷善住坊信長狙撃未遂」の記事を加える。（元龜元年四月の左に元龜元年五月の記事を置く）そして、各紙片内の記事と記事との間の空間を適当に広げると左「表2」のような組替表になる。

眼目としてこれは何をしたかという点、

(1) 弘治三年長政加賀守の娘と婚約を、永禄八年お市の方長政に興入れと上下で繋げた。

(2) 弘治三年長政加賀守の娘と婚約を、永正十五年高峯人質と左右隣接させた。

(3) 弘治三年以後の江南戦突入と、享禄二年以後の江南戦前夜史とを上下で並べた。

(4) 永禄三年江南新庄攻めと、永禄十年江南終焉とを上下で繋げた。

(5) 永禄三年長政の家督と、元龜二年長政、信長に心変わりとを上下で繋げた。

(6) 天正元年長政最期と、永正七年佐和山落城とを上下で繋げた。

(7) 永禄三年の後を少し難して、永正七年亮政らの佐和山とりかけに左右で連絡させた。

(8) 元龜二年信長の佐和山包囲を最後に置いた。

要するに、これは三代記中に強く自己の実生活内容の暗示を読み取り、三代記を恰もその暗喩・寓喩の物語として読み返した時、谷崎内部に生じた独得な「関連」であり、或る周期律の認知であった。このように組み替えられてくる根拠を論ずるのが本稿の目標である。

谷崎は「表2」組替表の上に大きな計算尺様のものを想定し、移動カーソルを徐々に右端から左へ動かしつつ、同一線上に来る上中下段の人や事件を睨み合わせながら物語を書き進めていった。以下谷崎の叙述に沿って主人公の事蹟を挙げ、資料的検討を付記することにする。

四、主人公の事蹟と資料検討

武州公秘話緒言（新青年第一回）

① 桐生武蔵守輝勝は戦国時代の初期頃ある一国を領した大名で、清和源氏の流れを汲み足利氏の一族でもある。鎌倉幕府の中葉執権時頼のころ分家し上州の桐生に入部した。のち南北朝の時代に足利將軍に従って各地に転戦し、以来子孫の人々が多く近畿の諸国に住した。『これら武州公出自の概略は、群書類従卷三八七江濃記「佐々木兩家わかりの事」に谷崎が依拠している。「佐々木兩家わかりの事」は云う。佐々木は頼朝の頃五家に分かれ京極も六角も「関東の賢佐武備の大名」だった。京極道誉の子孫が尊氏、義詮に忠勤を励んだ結果近江の諸郡を拝領したと。谷崎は佐々木宇多源氏を「清和源氏の流れを汲み」とし、頼朝の頃五家に分かれたのを「執権時頼のころ分家」とし、出自が関東武士であるのを「桐生入部」とし、道誉の孫たちの近江受領を「近畿の諸国に住」とした。無論一般の歴史辞典等に拠ってもこれくらいダイジェスト風な翻案は可能であるが、群書類従は常に谷崎架蔵の種本である上、「浅井出自事」にも参酌した形跡があるので、ここは江濃記にモデルを借りた

と見てよいだろう。東国に故地あることにより「武州公」の名も安堵されてくる。関連資料は浅井三代記（前掲。論者のテキスト改定史籍集覧六）「浅井井備前守先祖の事」「三代記三七頁」

② 父は桐生武蔵守輝勝、嫡流は桐生武蔵守輝勝で絶えた。『こちらには江濃記でなく浅井三代記に依っている。「京極武蔵守高秀」の名は三代記に三回しかその名を現さず伏流する人物である。組替表「表2」の経・緯を表すそれぞれの記号の組合せで云えば、

j 1 「三代記一七四人質時代の武蔵守高秀」

h 3 「同二〇七足利義昭の書簡を得た武蔵守高秀」

u 3 「同二八一没後と見做される武蔵守高秀」

じつはこの「京極武蔵守高秀」が、「武州公秘話」の主人公にあたる人物と考えられるのである。父も同じ「武州公」とするのは家督関係に思い致した谷崎の推量であろうが、「江州佐々木南北諸士帳」（近江国坂田郡志所収）には「京極武蔵守高峯」の名も見える。谷崎披見の有無は不明である。新青年第十一回稿に河内介が「父の家督を繼いで武蔵守輝勝を名告り」とあるのは「三代記二〇七」足利義昭が南都を落ち京極高秀に書簡を通じて小谷に御座を移す（h 3）あたりの高秀の動静が京極家の当主らしい振舞いであるのを谷崎が読み取り、浅井亮政の家督記事（組替表の h 1）等をも参考に作ったものだろう。「今後とも、同じカーソル線上に来るものは必ず勘案されている」なお作中から計算される「武州公」の生没年「天文六年（一五三七）〜天正九年（一五八一）」は三代記中の誰の年号とも一致はしない。嫡流が輝勝で杜絶えたというのは三代記の取材圏内で判断する時、京極、六角に該当せず、浅井三代に相当

する。

③夫人は池鯉鮒家お悦の方、剃髪後「松雪院」と称した。輝勝の叔父桐生三郎右衛門某は、公の臣下となって天神山の城を預った。『夫人お悦の方相当の三代記中の人物は、ひとまず組替表の f 2 江南加賀守の娘を養女の資格で迎える／また、k 2 送り返すことを前提とするような結婚(h 2)などを踏まえているとみてよいだろう。『池鯉鮒』の名の出処は不明。谷崎の昭和初年代座右の資料書大日本名所図会第七編の「池鯉鮒」辺りではあるまいか。叔父三郎右衛門某が天神山の城を預ったとするのは三代記組替表の s 2 新庄駿河守（作中では「井田駿河守」を悪玉と変えた「横輪豊前守」）が築城したのに対応し、新城を監視する役を谷崎が設定したもので q 2 「三代記十二」の「明神山」をもじり「天神山」の城としたものだろう。

④武州公は居城多聞山の小祠に自らの秘密を綴った願文を奉納した。『これは亮政が尊崇する木の本地蔵に願状を籠めたが「今相尋ぬるに其文章は志れさりき」「三代記四十」等の文面に刺激され「輝勝」に適用したもの。

法師丸時代

⑤武州公の諡り名は瑞雲院、幼名は法師丸。『谷崎蔵書、近江人物志二八〇頁京極高次幼名小法師丸、法名泰雲院辺りに基づくと考量される。高次は長政の妹が京極高秀に嫁して出来た子。⁽¹⁾長政の信長に対する遺恨やお市の方、茶々、初、小督らに対する思慕などを受け継ぐ人物として谷崎には、盲目物語以来関心の深かった人物である。「法師丸」系の幼名は信長（吉法師）大友義鎮（塩法師丸）長尾房景（小法師丸）等々に見るありふれた名前だが、武州公秘話で

は京極高次のそれ以外には考えられない。

⑥七歳の時、父輝国公が隣国筑摩家と和睦し、人質となる。筑摩一閑斎の館牡鹿山に遣わされ、以後一閑斎の麾下に属して養育の恩義を受ける。隣国筑摩は門地が高い。『組替表 e 2 永正十五年（一五一八）六月浅井家が京極高峯を小谷へ人質に取る（三代記一二二）が典拠。構想出発時の重要な拠点となった。左は京極が人質となる時の事情である。

〔三代記一二二〕浅井も内々京極の家を立置度との存念の上なれば不_レ斜悦て家老共の妻子を人質に取小谷に人數打入ける其後小丸と中の丸との東よりに丸を一ツ拵て京極入道（高峯、論者註）を請待申京極丸と名を付君臣の禮正しく尊崇する事かきりなければ亮政は義深き大將なりと人皆是を感じける

それにしても作中の七歳児の人質と、三代記敵將京極の人質とでは年齢が開きすぎる。谷崎はこの辺りをどう考えたのか。三代記を読み進めると高峯の人質状態は天文八年（一五三九）まで続く（三代記一六九）（g 1）とあるから十八年間である。高峯は許され上平^{ウツメイラ}へ返されている。谷崎には軟禁生活十八年間の星霜を経た老いたる高峯入道利角齊が想像できる。と共に人質とは嫡男を取るものという戦国時代の常識（第二回稿）も働いて、一子高秀が〔三代記一七四〕j 1の文面では、まだ小谷に住いして長政を可愛がっていたらしい確かめも谷崎はしていた筈である。すると、ここで気がつく事は、高峯——高秀一体のものとして谷崎が構想していただろうという事実である。二人合わせて、一人の作中人質「法師丸」である。こうした一体視の原則に馴れていかないと武州公秘話の構想解明は

一向に進まないのである。

ところで、谷崎が普段見ていた群書類従の卷第三百八十七江濃記にはこうもある。

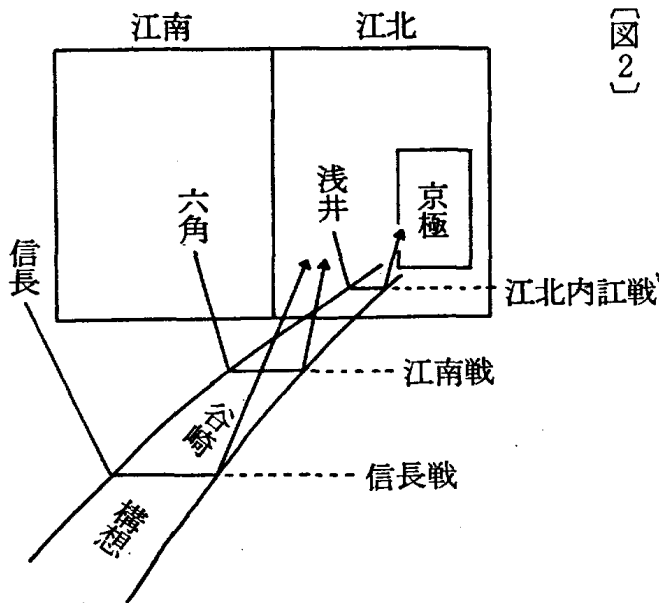
浅井出身事。

浅井休外齋人道橋高政は朝倉教景の吹擧により京極殿の一跡を給りけれども。國人おほく背ければ。伊勢の國司并長野若狭守關刑部太輔美濃土岐殿并齋藤。其外朝倉より加勢を請ひ。北近江五郡をやうく治めける。然而休外逝去の後。其子下野守久政の代に成て武勇父にとりけるにや。六角家にたより佐々木定頼の幕下に屬し。子息備前守を若年より六角の家老平井加賀守が督に定め。定頼の後猶義賢の代迄南郡の下知にしたがひける。

これは江北内訌の次にくる南北抗争下での屈辱的な江北（久政——長政）の姿である。谷崎はこれを見てピンと閃めく所があった。長政を江南六角定頼の麾下に付けたこの文面により、「長政は江北小谷城にあっても江南の人質同然——」の観念を得た。（史実もその通りだったのだが）ここは谷崎にさまざまな想像をもたらすと共に「京極武蔵守高秀も浅井備前守長政も同じ人質」という、再び同一視——一体化の視点を留意させた。実はここには「立場」の相通を認めるばかりか、内訌時代と南北時代の「時代の混ぜ合せ」——一体化も働いているのだ。人質を取った隣国筑摩は門地が高いと谷崎は書いた（第二回稿）。しかし成り上りの新興浅井にそんな事は云えない。それどころか浅井三代記が浅井家の家統を三条公綱落胤説で飾っているのを見分けるくらい谷崎には易しかったはず

で、門地が高いのは宇多源氏足利の血をひく京極（江北）六角（江南）に決まっている。すると何故「門地高し」なのか。「人質」を囲った父権者を江南六角、「人質」を長政とする江濃記説にも、谷崎は依拠しているのである。ただ前後の事情から京極高峯を人質と考えたい場合は、浅井の門地こそかの公綱公の落胤とする「三代記三七」説に頼ればよいワケだ。こうして我々は谷崎の構想法の秘密を握ることになる。谷崎が歩いている道は、まず次「図2」のような道だ。どの戦においても庇護者と人質との関係が一目で見渡せ、しかも時間差なく繋っている。同一視（一体化）を通じて三代記全体

〔図2〕



に網をかむせ自由に往き来できる通路を見出してゆく姿勢である。谷崎が初めから高峯・高秀らと長政とを混ぜ合わせ、江濃記「佐々木兩家わかりの事」や三代記 e 2 (高峯人質) で説明できる京極氏を、長政に置きかえて説くこともできる視点を据えたということは注目されてよいことである。しかも初めからそうだったということとは、今後とも人物や事件に含まれた表裏さまざまの意味の通底や類似性を考えなくてはいけないという事である。

参考

江北	京極	高峯—高秀—高次
江北	浅井	亮政—久政—長政
江南	六角	定頼—義賢—義弼 (抜開齋)

⑦天文十八年法師九十三歳の年、筑摩家は薬師寺弾正政高の兵二万騎に包囲され、牡鹿山に籠城、女童と同じ所に寝起きをした。年嵩の婦人達の語る戦の様子に幼い胸をときめかせた。『武州公』のモデル(京極氏十長政)の決まった谷崎が最初に主人公を歴史的現在に投げこむのは京極戦の場に於いてである。組替表の a 2 から d 2 まで、即ち高清病死から第一回包囲を経て永正十五年京極江南兩勢の小谷表に攻め寄せる第三回包囲まで。これら三回の対峙を一回にまとめ上げ高清の病死を包囲戦の終りに持ってきた。つまり、a 2 ~ d 2 すべてを後先なく一体化せしめており、その上で、直かに(前夜なしの)江南戦へ繋げていこうとする訳である。勿論ここが繋がるのは、浅井家から受けた人質待遇の高峯と、江南六角

から受けた属国待遇の婚約を強いられる長政とが、共通の立場で一人物に仕上げられているからである。何か性急なものが感じられる。と云うよりもその立場を通して谷崎の深層を覗くなら、いわば人質となった瞬間に(e 2)、あてがい妻に変じた花嫁を(f 2)無理にも里へ返そうとすると(k 2)、義父が怒る(1 2)。といった意味が隠されているのであろう。そんな鳥羽絵風な幻想の中で少年は女首を目撃し、「駿河守の娘」のふしぎな微笑を見るわけで、ここには作中に描かれなかったへ送り返された妻の憎悪が隣接してくるわけである。——実は後段⑤に行き、三代記素材の中でそれが証明できるのを私は大変面白いことだと思っている。作品結果よりも構想自体の方が複雑に合理的に出来ているのだ。

寄せ手を「薬師寺弾正政高」としたのは「三代記九」「京極政経三男、上坂の家を繼ぐ」を見ているからだろう。政経の元の名が政高であるのは統群書類従卷一三二、一三四の佐々木系図等に出ている事である。亮政が倒そうとした江北の領袖京極高・上坂の共通の根が政高である。攻めて来たのは江北の佐々木京極の「総力」だという事である。さらに「三代記七六、九一、一〇九」三度に渉る包囲を見ていると、組替表 b 2、c 2、d 2 の戦内容でも分かる通り、江北内証が次第に江南江北挙げての佐々木勢力(Ⅱ京極十六角)対浅井の戦いになっている。「政高」は虚構の名ではなく、ちゃんと三代記に基づき、南北佐々木に争いのなかった頃(三代記九)の象徴として、谷崎が配慮して付けた名前であるようなのだ。ところで三代記を読んでいた谷崎が小説の舞台として最も魅かれたのは、外光みなぎる佐和山城辺(三代記二三、一九、二三)と、も

う一つは小谷城京極丸〔三代記一二二、e2〕である。京極家老の妻子達との籠城という設定は湖北の山城の奥に咲いた谷崎の幻想の一つであったということは言い漏らすことができない。g1で高峯が上平寺城に去った後も留め置かれた武州公高秀がその青壮年時代を送った城、長政が利発さゆえに高秀や多くの家臣に愛された城、やがてお市の方が迎えられ茶々・初・小督の三姉妹も生まれる。京極高次がこの三姉妹を大好きになった思い出の城でもある。

⑧或る夜武州公法師丸は老女の導きで首装束の場に案内される。法師丸は「井田駿河守の娘」が扱う鼻欠け首にいたく魅かれ娘の首を洗う手つきや微笑に妖しい思いを喫する。自分も鼻のない首になって娘に扱われてみたいという空想におののく。これは周知のおあん物語「首装束」等に基づく、同材として三代記にも〔三代記二五六〕土一揆の耳鼻千八百、〔同一五四〕定頼の前にさし出された「井口が首」、信長記では天正二年元日の義景・久政・長政の薄濃首などがある。これらを見つめる信長や定頼らの満悦の笑いが女に移し植えられて空想されるという史料とのかかわりは考えられてよいだろう。

⑨法師丸は夜中の二時頃こっそりと裏山の溪に降り間道を伝って城外へ出た。牡鹿山の城は後ろに重畳たる山岳地帯を控え、城のある部分だけが半島のように突き出しているので敵はその裾をU字型に包囲していた。法師丸はU字型の上部の切れ目から一旦包みの外に逃れ敵將の寝所に忍び寄って、薬師寺弾正の命を奪い鼻を切り取った。敵本陣の一角に火の手が上った。『間道』は〔三代記七九〕「秘して通ふにぬけ道あり」、〔U字型〕は〔三代記七九、一二二〕「三

方に順ひて」などによる。

〔三代記一二二〕斯て寄手は小谷一方は大山なれば三方に順ひて無難城を取圍む(e2)

京極包囲に対する浅井側の作戦は三回(b2、c2、d2)が三回とも小谷城の裏側にそびえる天険を利用してその間道を伝って夜、忍びの者を城の外に放ち工作させ土民や朝倉側と連絡を取り合うなどして内外時をはかり一挙に奇襲作戦に出る方法である。これはb2「浅井が夜軍」〔三代記八四〕と言われ小谷の近隣を熟知した亮政の最も得意とする戦法だった。法師丸の隠密行動と密かな武勲もこの戦さの骨法を転用することで作られたものである。白河夜舟の敵陣〔三代記一二二、一二三〕殺陣シーン〔同八三、八四〕火付けの事〔同八二、一二二〕なども同じ。しかもただ法師丸潜行の出来事だけでなく、〔三代記七九〕六行目「秘して通ふにぬけ道あり」などは、桔梗の方の廁へ通じる地下道や的場親子の様々な隠密行動を設けるための着想源だったかも知れないのである。

⑩薬師寺弾正政高はその後陣を解いて京に戻り油小路の館で病死したと歴史は誌しているが真相を知るのは少数の近習と城の方では法師丸一人であった。『ここは京極持清の病死(a2)』を根拠とし、「筑摩家」の内容を「浅井十人質京極」と見る時の六角定頼の病死(q1)などをヒントにしている。共に春先の領主の病死である。

以上が三代記江北内証に取材した「法師丸」時代(新青年第四回稿まで)の典拠である。三代記組替表に従って秘話の叙述も進んでいる。

河内介時代

①天文二十一年正月法師丸元服（十六歳）河内介輝勝と称す。引き続き一閑斎の小姓を勤めていたので父輝国が領地より挙式に出向した。加冠には長小結の烏帽子を用いた。』法師丸元服について谷崎の態度が明確なのは、加冠に伴う結婚という三代記の記述の中から加冠のみを拾い結婚記事を切り捨てた姿勢である。年令十六歳は江濃記に基づいている。「三代記一七五」にはこうある。

其後に永祿二年正月新九郎十五歳なれば備前守長政と名を改め
 /右の平井加賀守か姫とめあはず其時に長政理不盡に縁を組せ
 ける

谷崎はこの前半のみを参考に行っている。一体長政元服の時期については組替表の f 2 弘治三年冬長政（十二歳）江南加賀守の娘と婚約、養女の資格で迎える / とも、降って k 2 永祿二年四月長政加賀守の女を送り返す / とも絡む一連の事件であったはずだ。何故切り捨てたのが問題となる。先にも述べたように谷崎の深層においては、人質状況にある抑圧された感情を高峯・長政と結び付ける事でいやが上にも高め、f 2 k 2 一連の嫁返しの幻想となって庄ねして来ているはずであるが、それを作品に表さず構想の内だけに留めてしまうと言うのは如何なる訳であるのか。長政の野心もこの嫁返しのみならずみなくして語れなかった筈である。同趣の記事は江濃記にも見られ谷崎の目に触れていた。「浅井出身事」の続きには次のようにある。

〔江濃記〕六角家にたより佐々木定頼の幕下に屬し。子息備前守を若年より六角の家老平井加賀守が聳に定め。定頼の後猶義賢の代迄南部の下知にしたがひける。爰に備前守長政十六歳の時、家来の赤尾。丁野。百々。遠藤。安養寺等と評定して父の

下野守久政を隠居させ。萬事政道を改め祖父高政入道のごとく六角家の下風に立まじとて。平井加賀守が娘を送り返し六角と無事をやぶり。手ぎれの軍可し有よし其用意有けり。

これに就いてはまず、史料の趣旨と大きく反することであるが谷崎は政略結婚の性格を武州公事蹟から捨てている。(一)加賀守の娘破鏡の嘆に基づく怨みは構想的に（具体的には組替表 f 2 ↓ f 3 により）お市の方で現れるよう組み替えられた。(二)嫁返しに代わる私怨の原因は法師丸の薬師寺政高はな刺り事件の裡に求められた、ということが指摘できるだろう。

ところでこれは長政を中心に見たのだが、「武州公」の半面のモデルである京極氏に就いては如何なっているか。というのも、「ひきつづき一閑斎の小姓を勤めていたので父輝国が領地より挙式に出向した」という本文は『ひきつづき小谷城浅井家の人質であった京極高秀（この頃は j 1 より高秀）が久政の小姓を勤めており、祝いの席には父高峯が上平寺城より赴いて取り行われた。』の意味になるからである。そうすると典拠は京極武州公高秀記事 g 1（上平）、j 1（小谷の城で長政を慈愛）、h 3（義昭）等の環境の下に、h 2 長政元服に連動されて作られたものだということが分かってくる。カーソル線は長政元服を含む h に照準されその線上及び前後を勘考しつつ谷崎は作っているのである。

こうした類似せる人物や事件の結合、言い換えれば「人質」とか「庇護者」とか「恨みの火を抱く妻」とかいう役割類型の中に近似する幾人かの史料人物を投げ込み、いわばそのガウス記号[]の中に同時に二人在らしめたり別な第三者の人物と摩り替えたりして史料

を別の物語へ焼き直してゆく、史料に独得な通路を見出してゆくと
いうのが武州公秘話構想の顕著な特徴なのである。三代記年譜の組
替えも決して便宜的な態度からではなく、自己の実生活の暗示を作
中に読み取ることの強さから自ずと出来上ったものである。

「加冠には長小結の烏帽子を用いた」は谷崎蔵書日本結髪史三八
頁黒塗りの烏帽図、及び三二頁の解説に基づく。三二頁には当時近
臣元昭には長小結の烏帽子、將軍家では立烏帽子を用いるなどの区
別、故実が記されてある。第四回稿「大将齋」第八回稿「茶釜髪」
なども本書三六〇三九頁の図解に依ったものと考えられる。

②天文二十一年夏、河内介輝勝、一閑斎に従って箕作城攻め。』組
替表のn2永禄三年長政・浅妻に籠る新庄駿河守を攻める（江南の
棄はこの戦では箕作城）／と、n3永禄十年一月江南箕作城（承禎
・義弼）落城／の二つを結び付けたものだろう。三代記は加賀守の
娘返送後の記述を、暫く南北抗争に絞って描いている。「三代記一
七六一一七九、一八八一一九三」。「箕作城攻め」はその端緒として
の高宮合戦以下を象徴する言葉である。史料に該当する人物を求め
れば江南攻めに功績のあった長政高秀（三代記一七四、j1のコン
ビ）が作中にいう「一閑斎・河内介」である。ただ、谷崎は南北両旗
の接衝を省略し、もう基本的に南北抗争とは言えない信長介入後の
江南攻め（三代記二〇三一一二三）n3——その江南終焉の「箕作
城攻め」をも含めて述べているようである。こうなると「一閑斎・
河内介」のコンビは「信長（新しい父権格の庇護者）・長政」という
意味合いも出てくる事を着目しておかなくてはならない。格別「秘
話」自体としては、箕作城（江南に実在）が薬師寺方（江南相当）

にあると明かす訳ではないから支障は生じないし、三代記にモデル
を借るとは言え軽い内容であるから構わぬようなものだが、しかし
構想的視点からは「何故そんなに先へ急がねばならぬのか」という
問いを発することができる。基本的には「急ぐ」のではなくて「自
由」なのだが、それにしても中間者である「六角・長政」の筑摩
家概念を蹴つとばした恐ろしい飛躍なのである。これを考えるには
人質・庇護関係の裡に含まれた女性の問題を是非前提としなくては
ならないだろう。すなわちこうした人質・庇護関係にあつては強者
から弱者に女性が充てがわれる。見てきたように①京極高峯・高秀
父子らには小谷城京極丸という家老の妻子や高秀仮託の武州公がみ
た駿河守の娘といったハーレムの状況が（これはすでに法師丸時代
の話として終っていた）②浅井久政長政には例の加賀守の娘が③信
長侵略時代の長政には信長の妹を娘分とした（三代記二〇六八行目）
お市の方がそれぞれ充当せられる。従って谷崎が①から③へと中間
の②加賀守の娘を裏側に回し（作品上でも捨象して）筆を速めるの
は江南箕作攻めをただの父権悖戻に終らせることでなく、火つけ役
加賀守の娘②とお市の方のもつ遺恨（歴史上広く知られたお市の方
の悲劇）③とが当然のように一つの表裏に（性急に）繫つていなく
てはならないとする谷崎の要求（一体観）に基づいていることが、
分かってくるのである。これは谷崎の実生活に由来する勘案であ
って、作中箕作城攻めを敢行する一閑斎らとは何ら関わりもないこ
とだけれども、戦の一番根底に二つの「火」が繋り、ある悲劇性と
か遺恨の実体とかいうものが見えてこなくてはならないとする谷崎
の構想的要求に起因しているのである。

筑摩家		一閑齋	武州公
長政	高秀	六角	長政
信長	長政	六角	長政

ちなみに谷崎がかくも史料時計を早めた証拠の一つは次のような文面でも明らかであるだろう。

〔第五回稿〕しかし戦場に於ける勇士としての輝勝を叙することとは此の小説の目的でない。以上に述べたやうなことは、「筑摩軍記」（＝架空の書物、論者註）の「箕作城落去のこと」の條その他くさぐさの軍記類にも皆記されてゐる事實である。

〔三代記二二三〕箕作城落居の次第信長記にあらまし出申候ゆへ畧仕候

文面はともに江、南、終、焉、に、つ、い、て、述、べ、た、も、の、で、あ、る。谷崎は三代記の編集言をまねているのである。

⑬薬師寺弾正政高の死の翌々年（天文二十年）薬師寺家と筑摩家との和議が整い、筑摩則重は政高の娘桔梗の方を令室に迎えた。これはf3永祿八年春、信長、長政を縁者に望み、妹お市を娘分として興入れさせる／による。二年溯った記事として、宿題のf3が「則重」に於て語られてくる。谷崎の組替プランによればf3とa2京極高清の死とは二年差ほどで近く、e2人質策による京極との関係平定、f2久政和平策の一環としての加賀守娘との約束などその趣旨においてf3と

同じ、実際谷崎は久政の和平の論理を作中にも仕組んでいる、三代記の組替プラン年次をそのまま読んだ作法である。

⑭天文二十二年筑摩家一閑齋の病死『筑摩家とは上表〔表3〕のような三つの場合を指していうので「一閑齋」は一部主人公の長政に

もかかるが三代記中で一子（則重）を持つ庇護者といえは六角定頼に決まりである。（六角義賢は死んではいず逐電する）定頼の死を、⑫で説いた箕作城攻め（n2）箕作城落城（n3）の後ろ（o1）に置くのは、o2、o3にも共通する周期、父権からの独立を谷崎が認めているからで、組替表上段におけるo1の位置は正しいことになる。これは三代記の概要「表1」からは考えられもしない順序だが谷崎の構想裏からそうなるのである。作中「天文二十年の春、病死」として時期と原因とを拝借している。「桔梗の方」の暗躍と史料の病死とが結びつけられ謀殺をほめかすような叙述が起こされる訳である。六角家では次代の当主義賢（入道名承禎抜閑齋）が立ってくる。作中の「則重」これである。長政が谷崎の好みで信長に殺されないとすると、長政の敵対目標は永久に江南六角義賢となり（何故なら箕作城はまだ作中に何処と謳っていないのだから）「武州公」の攻撃目標もやがては「則重」代の筑摩家に振り向けられることになる訳だ。だがこうした谷崎の好みの問題は実生活面から説明した方が分かりやすいだろう。一方⑩でも触れたように、高（政高）に置換）と今回の定頼（一閑齋）との死因が似ている所から、谷崎は両者を相互の報復行為と作り、最終的な報復を桔梗の方が則重に加えるようにも作って行った。これは⑦でみた通りa2がd2の後ろにあり、o1がf2の直前年次であるとき、組替表紙片の隣接から自然に出てくる着想なのである。武州公秘話の骨子である「則重の鼻狙いの構想が、単に谷崎の自在な発想から生まれたものでなく、報復の応酬という三代記の読みを通して出てきたものであることを理解することができるのである。――

難しいからと云って投げ捨てる訳にはいかない。谷崎がまさにそのようなトポロジイ的な思索を試みているからだ。

⑤天文二十三年八月、筑摩則重は横輪豊前守叛逆の報を聞き月形の城を攻める。』ここは三代記述の流れからすれば単に前項からの続きで南北戦の緒戦高宮合戦の後、新庄駿河守が江南方へ寝返りをした記事の置き換えである。「筑摩家」とは江北長政ら、「横輪豊前守」とはm2永禄二年七月江南太尾城に人質を渡し江南へ返り忠した新庄駿河守を指し、事件としてはn2永禄二年三月長政、浅妻に籠る新庄駿河守を攻める／にあたる。——谷崎はやはり信長を避け敵を江南に摩り替えたのである。が、ここはそればかりでなく「月形城」と呼ばれた浅妻の城〔三代記一七九浅妻の城〕に一寸した逸話を求めて組替プランの記事を戻したのである。既に敗退した箕作城落城に至るまでの前過程へもう一度戻るだけの逸話とは何か。

新庄駿河守は太尾城より一里ほど西南の浅妻という所に城を構えて楯籠っていた城主である。高宮合戦の後でもあり南北両軍も引き去った後で境目の城主達は皆駿河守のように一息ついていていた。すると江南勢はふいに浅妻太尾佐和山の城へとって返し再開戦を挑んできた。余りな驚きで狼狽した新庄駿河守は、敵の手に落ちた太尾の城に人質の息女を送って浅井を裏切り剩え久政を嘲った。小谷の城でこれを聞いた久政は笈助佐衛門に預けていた駿河守の人質——当年八歳の男子を串刺しにして、浅妻から四五町北の世次村の川端に晒して付け番を置いた。永禄二年七月の事。〔三代記一七九—一八一〕2m。

谷崎がモデルとした長政の進発はこの時のものであるが濱道浅妻に立籠る新庄駿河守の寝返りを咎めようと浅妻・太尾の両城に息もつかせず攻めかけると駿河守は太尾の城に遣わした娘を城内の侍と計ってこっそり夜の内に盗み出しましたぞろ浅井に降参して旧主に戻った。永禄三年三月の事。〔三代記一八八—一八九〕n2。

もともと浅妻筑摩・磯山・太尾・佐和山などの一帯は三代記で初めて紹介される近江の要衝である。南北係争の地ではあっても湖水の東に筑摩江、米原の入江〔三代記一九〕が広がり回廊状の洲が走り渺々としてどこか伝説的な「筑摩軍記」の名が相応しい土地柄であって、当時谷崎が手にすることができた坂田郡志・大日本名所図会などを座右にその夢を弾ませたに違いない土地なのである。それに谷崎が「月形城」の謀反にこだわるもう一つの理由は、駿河守の「息女」〔三代記一八〇、一八九〕が恐らく谷崎にとってあの武州公法師丸時代に見初めた「井田駿河守」の娘だったに違いないという事である。長政はその娘が太尾に移り浅妻に戻ったがために窮迫し又駿河守を許したという函数関係におかれている。いかにも憎さげな、しかし本当は可愛そうな内股膏薬の城主にも魅力がある。しかもその娘はどうかと言うに、隠れた小さな黒幕になれるだけの資格を備えてもいたようだ。永禄二年七月弟（八歳）を久政に殺され串刺しの刑にあって浅妻川北辺に晒された。この痛恨の火は長政に及んでもおかしくないし、加賀守娘の破鏡、お市の方の万福丸喪失の場合にも並ぶ同列の火種である。しかも長政相当の「河内介」は「駿河守の娘」が好きだというから、これは一寸「月形城」に馬首を向けない訳にはいかない、何らかのプランが谷崎の手中に伏在したで

あろうと思われるのである。あるいは弟受難の時期が遅すぎて、首装束時代の娘の「微笑」の原因とはなり得なかつたのか、何らかの構想割愛の事情があつたと考えられる箇所である。⁽²⁾

⑩月形城攻めの合戦の最中に筑摩則重は鼻先を銃弾で狙撃された。天文二十一年千種川の合戦における父一閑齋も顔面すれ／＼を狙われたことがあつた。『信長公記』、野史などの文面に拠る。

〔信長公記一七三—一七四〕(元龜元年)五月十九日(中略)千草越にて被成御下候。左候處杉谷善住坊と申者佐々木右京大夫承禎に憑まれ千草山中道筋に鉄炮を相構無情十二三日隔信長公を差付二つ玉にて打申候されとも天道昭覧にて御身に少つゝ打かすり鰐口御遁候て目出度五月廿一日濃州岐阜御歸陣

〔野史四十三佐々木高頼三十六丁〕

元龜元年五月。信長歴千草嶺而歸美濃。承禎嘗陰伏山谷。是時遣客杉谷善住。或作牧谷操銃。狙發二丸。中。信長甲袖。而不入。織田家譜
桑名雜記

信長記や野史の千草越記事は杉谷が承禎の命を受けて信長を狙撃したと読めるだけかもしれない。が、谷崎はその最も始源に、加賀守の娘の恨みを据えた。戻されて里親に漏らす娘(旧妻)の恨みを起点として表には形を変えて加賀守の策動へ承禎へ杉谷へと波及し、終に信長の身辺に及んだと谷崎には読めた。しかしここまで読めたとしても必ずしもそれ以下の構想が順調に進むとは限らない。随分と多くの障害や工夫が存在していたらう事に我々は気が付く。

(1)まず直接旧夫の長政にでなく旧夫の新しい父権者信長に杉谷の銃弾をあてるためには長政お市の方信長という新しい縁組に対する

加賀守の娘の嫉妬のようなものを想定する必要がある。これは当然である。

(2)つぎに谷崎の実感では、自らの妻であつた千代夫人からその報復を受けるべき日常茶飯事の底に危険と苦患とを用意されなければならず、時折髪をあたってくれる千代夫人のうわべは何気ない手つきの中に剃刀の柄が握られているのでなければ真の恐ろしさは味わえなかつたのに、それを長政はお市の方から受けるべき理由がない。ここに加賀守の祝言とお市の方との縁組は不二のもの(ひとつながりのもの)とする創意がある。「二つの記事の上下隣接」これが組替プランの起こされた最も大きな要因と言えるのだが、ここにはまた稚拙な矛盾も生まれている。離縁した恨みを持つ妻と何故に再縁するのかということである。一步技巧を進め「離縁した妻の恨みを、どう新しい妻がひき継ぐのか。」と改めてみても、ここには相当に至難の課題が含まれてくる。

(3)谷崎はこの時はじめて「千代夫人」と資料とに基づく机上の構想を、現実の松子夫人と重ねあわせてみたのではないだろうか。あるいは逆に松子夫人を思いみると、加賀守の娘とお市の方の合体(狙撃事件の黒幕)としての姿が思い浮かび、独得な狙撃事件の解枳が出来上がったのかも知れない。個々の条件は後の(i)(ii)で述べるとしても、谷崎には松子夫人ならば先の課題をらくらくと越えていく条件を備えた女性であるように思われた。たしかに新しい妻が離縁した先妻の恨みをひき継ぐなどという設定は不自然であり、加賀守の娘送り返しの素材f2は切り捨てなくてはならない。お市の方のもつ恨みにしても、何か別途な新夫の行動によって形づくられない

くてはならない。しかし松子夫人は、そうした不自然さを不自然と感じさせない或る世間馴れた智略を有し、また至高な飛躍をも約束してくれるモデルとして、谷崎の机上の構想を保証してくれるように見えた。——実際のところは多少の誤算も生じ、谷崎は新夫に復讐するために結婚した烈婦という、加賀女お市の合体構想を最後まで持ちつづけ、また処理しかねていたのである。現実の松子は烈婦というにふさわしくなかった。けれどもそれは結果論である。——谷崎は執筆当時寄寓していた根津家の当主清太郎や夫人の松子におのずと目を転じ、武州公秘話構想は長政一人に集中するのではなく、他家を含んだ二つの家の物語に分離していくことが必要だとさとした。

(i) 思えば昭和六年五月、谷崎家が債鬼に追われて高野山に落ちのび、その秋には根津家の世話で河内郡孔舎衛、西宮市外夙川と父権を根津清に預けたような流遇生活を続けたのはまさしく河内の次官生活だったに違いない。しかもその根津家は破産寸前にあり戦国武将の習いからすれば討ち果すに恰好な隣国とも見えた。松子夫人とその妹らをも根こそぎ領略した方が却って清太郎は経済的に助かるような事情にもあった。谷崎には年来のお市の方にも比せられた松子夫人が、昔の千代夫人と同質の恨みを清太郎に対して持っているに違いない。この構想は完成すると分かった。つまり他家と平行で、双方に嫁返しの罪があり、広義の再婚があり、双方に受罰者がいるという形でこの三代記に基づく夢は実現すると。——そして谷崎は確かに松子夫人の中にそうした恨みの火を仮定することが出来た。

(ii) 谷崎は結婚前から小田原事件以後を通して様々な意味で係わっ

てきた千代夫人三姉妹を思い出すにつけても、森田三姉妹に同じ様な係わり方をした根津清太郎との出逢いに、へんな同類の意識を抱き因縁を感じ始めていたに違いない。昭和六年に書かれた盲目物語中の人物京極高次が反信長の一翼をなし本能寺の変後の追及を逃れてお市の方のいる越前柴田の城に頼って行ったのも、実は茶々・初・小督らの三人姉妹が待ち受けていたからだ。高次は長女の茶々に求婚し振られて次女の初を嫁にしたと谷崎は盲目物語に作っている。(そして谷崎の初恋の相手も初、振られた向島の求婚の相手も初、お市の方の二女も初ときては三姉妹との因縁を感じない訳にはいかなかったのだろう。) そんな、女子に動かされる武将のテーマを胚胎した盲目物語のすぐ後につづく武州公秘話が、主家滅ぼしの裏に何らかの女子の支配をおくという主題をもつのも当然である。

谷崎は昭和六年十一月妹尾健太郎宛書簡に「倚松庵」の号を用いている。⁽³⁾ 高野山時代にもわざわざ下山し財産処分などの悲しい相談に乗って来た潤一郎松子二人の接近は意外と早く、谷崎がある時青天の霹靂のようにこの御寮人を我物に出来るかと予感し、或いは確信したのもその「倚松庵」の頃だったと思われる。しかし松子と結婚するとなれば若妻の丁未子夫人はどうなるのか。松子を去った清太郎への恨みを松子の中に見出すにつけても、谷崎は単なる三姉妹の血の類縁以上の「千代・丁未子・松子」に共通の恨みを見出さない訳にはいかず、そうした他人同士の内横たわる恨みの点で史料の読まれてしまう中に「駿河守の娘・加賀守の娘・お市の方」の一体化の読みが出来上っていったものと考えられる。

(4)そこでもかくも谷崎は根津清太郎に相当する「則重」を新設した。これは三代記中の人物の誰をも写していないが強いて言えば久政の気弱に通じるだろうか。谷崎は「根津家横領、松子夫人以下の領略」をテーマとする成り行きを敢て辞さなかった。寧ろ情熱を傾けた。松子夫人に対する嫌みも恋慕の思いも総てを打ちあけるようなつもりで構想を完成しにかかった。

問題のf3お市との祝言の位置は組替表三段目自体を則重の事蹟とすることそのまま安堵した。これに付随して二段目は武州公の事蹟とするという線がおおむね決められた。⁽⁴⁾

(5)また杉谷の信長銃撃の頃には信長・長政関係も破綻しており、縁者関係も捨てられているので、「銃撃事件」を永禄十年以前駿河守(「豊前守」)謀反の以後辺りに持ってきた。

こうしてやっと加賀守娘の恨みの火はお市の方に移されその禍毒がところを変えて実生活から引いてきた「則重」(「根津相当」)に加えられるという構想が出来上っていくわけである。随分多くの創意工夫が必要だったことを知るのである。谷崎はこうして松子夫人のために仇討ちをすることが即自罰につながってしまうような矛盾を、あの無限級数的に不可能な「女首」の観念に託して表して行くわけである。

五、結語

磨る墨の中に次々と蘇芳や黄金の油煙が吐き出されるような多彩な意味の重なりが武州公秘話には仕掛けられ、実生活寓意の森を成

していた。その三代記から得た構想は作品結果以上に複雑かつ合理的な側面を備えていた。三代記焼き直しの手法には何処か思考のモードそのものに挑戦するような綺想体風でマニャクな何かを宿しながらも、それはいかにも谷崎らしい強力な磁場のものであった。確かに史料から実生活にまつわる暗示や寓意を読み取りこれを資料に即して体系的になぞる、主題も粗筋も全く異なる、一つの話を作る、などは、翻案とも依拠ともつかない特異な小説作法に違いない。が、振り返ってみれば我々の最良の読書においてもそういう事は有り得ることである。何げなく字面を見つめているだけでも自分の中の見えがたいものが見えてくるような歴史書、宗教書、自然科学書とか、一種の風光明媚さを備えたよい書物、よい読書というものは、事実として有り得ることである。谷崎の三代記に対する思い入れも前作盲目物語(昭和6)以来、特別なものだった。むしろ三代記の与えた戦国だましからの残夢を打破ることが相当に難事であったがために「武州公秘話」構想はできあがった、と云ってもよい側面をも、多分に備えている。

論として未完だが大体の目標に達した。あと亮政時代の佐和山とりにかけに戻って行く環流的構造、半面、浅妻筑摩に「鯖江城」を陣取って高次に長政のもつ反信長の意志を継がせて行く残心の構図、「筑摩軍記」の意味などを述べると完結する。(昭62・10・30)

注

(1) 京極高次は史実では高吉と長政の次女との子であるとされるが、盲目物語(昭6)においては高秀と長政妹の子とされている。谷崎の構想面を見ると、盲目物語の叙述を重んずることが大切であろう。高次

は浅井家に取り込まれた京極、六角家に取り込まれた浅井、ふたつの人質的な立場を相兼ねる人物で、常に谷崎の同一視構想の中心的な位置に「武州公」として想定されていた人物である。

(2) 谷崎の構想では「月形城攻め」に於いてこそ、「井田駿河守の娘」に逢えるかも知れない予感(15)と、「則重」が同城攻めの最中に狙撃された銃弾への疑念(16)とが結びつき、歎びと恐怖の弥増す戦場が想定されていた筈のだが、しかし谷崎の筆は意外なほど不発に終わっている。「則重」が銃撃されると「河内介」の胸には「ゆくりなくも久しく忘れてゐた少年時代の悪戯の記憶」が呼び戻された、と作り、「鼻を斬られた薬師彈正の死に顔——女首——首を見詰めてゐる美女の謎の微笑——」と羅列するが、そのあと、やや投げやりな調子で、定めしそれらの幻影が電光の如く彼の眼の前を過ぎたであらう。

(第五回稿)

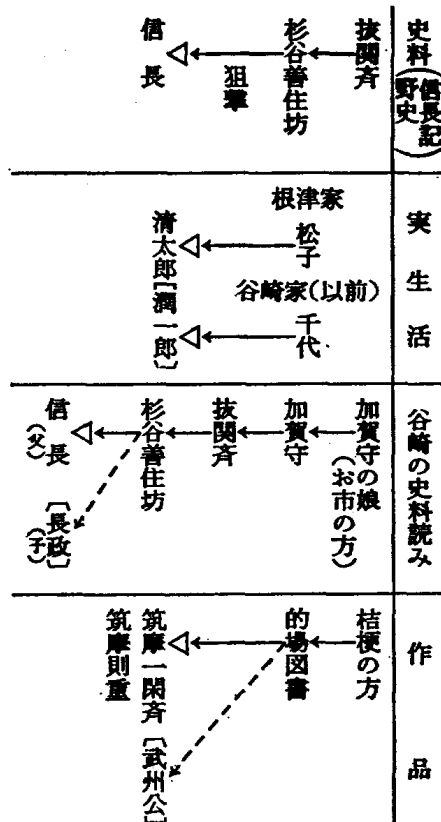
と記して忽卒に「女首」の件を切り上げている。

ここは谷崎自身、わざ／＼首装束の場に離縁された妻の憎悪を隣接させ(2)、「微笑」する娘の父新庄駿河守の動静を物語各所に配置(4)、(12)、(15)しておきながら、「娘」の謎めいた微笑の確かな根拠を構成し得なかった不興の気分が反映していると考えられる。構成し得ない難しさはしかし様々に想像できるけれども、例えば作中「井田駿河守」「横輪豊前守」という二人の人物の別立てという結果からも想像される。というのも、(15)などの資料事実を観察する限り、この二人が三代記新庄駿河守一人に由来することは明らかで、谷崎は寧ろ三代記新庄駿河守のもつ境目の領主らしい二重人格的な振舞いに興味を覚え、その事蹟を熱心に追っていた筈である。恐らく父親の極端な二重人格の振舞いが、娘の浅井家を恨む気持の一貫に水をさし、心理描写や筋立てが余りに複雑化する傾向を読み取って、第五回稿辺りから悪玉「横輪豊前守」を繰り出したものと考えられる。

(3) 大谷晃一氏「仮面の谷崎潤一郎」(昭59・11・20 創元社)一二三頁

(4) 如上の事実に対し、一段目の紙片(江南戦前夜)は谷崎に大体の「作中年次」を与えることだったと云えるだろう。本稿も「天文二十三年」までを迎えれば、秘話の大半が尽くせてしまうのである。

(5) 杉谷記事がもつ意味の図解を試みた。



信長・長政が江南抜閼斎を敗退に追いやるという武略上の恨みに併せて、加賀守の娘には自分を破鏡の嘆に追いやり新しい縁組をした信長・長政父子が、怨めしい。これが三段目のパターンに現れた実線点線矢印の意味である。ところでこの図は、上より順に「潤一郎」||「長政」||「武州公」の一体関係を見ると、本当は「潤一郎」や、今いう「長政」が撃たれてもよい秘密を有し、「武州公」も真犯人として桔梗の方に撃たれてもよい秘密を有し、真に撃たれてもよい秘密を有する主人公が偽って遺恨ある愛人のために代理で仇を討つというのが、武州公秘話の骨子である。パターンをみると「」の人物は、すぐ上にくる人物に父権を渡し庇護されているが、やがてそれを内側から滅ぼそうとする意志をも同時に抱いている。(その意味で長政の反信長の意志は高次に引き継がれる。)その意志の半分は武略ないし変態趣味と

いう自前の欲求に基づき、あとの半分は女性からの意志を偽って代行する所に求められている。ところがパターン第二図の対称性が示すように、千代や松子の恨みは根津清太郎が代行して潤一郎を襲ってもよいという点に、生きながら生ま首になりたい願望の、加害にして被害、仇討にして自罰の矛盾、無限級数的に不可能な性格が、生まれて来るものと考えられる。特に清太郎が谷崎を襲わなくても谷崎の道義の中に「真犯人」のおそれがあるならば、同じであるだろう。